

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 76 号

平成 20 年 8 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

ウィリアム・バークレー

「希望と信頼に生きる ウィリアム・バークレーの 1 日 1 章」

（柳生直行訳・ヨルダン社）より（3）

2 月 18 日 聞きたもう神

神への祈りには遅すぎることも早すぎることもない。

人を訪ねるとき、朝早すぎたり、夜遅すぎたり、忙しい最中だったりすると、わたしたちはつい遠慮してしまうものである、邪魔にならないか、仕事の妨げになりはしないか、忙しくて会ってくれないのではないか、と考えるしまうからである。神の場合には、そんなことはけっしてない。朝早くても、夜遅くても、真昼の忙しいときでも、神は聞いてくださる。

神に祈るのに小さすぎる人間、大きすぎる人間などというものは
ない。

人物の大小を問わずだれでも、いつでも神に近づくことができる。神の眼の前には大も小もないからである。

神に祈るには幼すぎるとか、年をとりすぎているとかいうことは
ない。

だからこそ祈りは、危機や危急のときのためでなく、すべての人の日常生活のためにあるものなのである。神は祈りを聞いてくださる 世界の祈りを、そしてわたしの祈りを。

2月19日 祈り(1)

祈りには祈りの法則がある。次の二つがそれである。

1 祈りは神がわれわれのために何かをなさることではなく、われわれが自分でやれるように助けてくださることである。

神は、わたしたちが自分でちゃんとやれることを、わたしたちに代ってやるようなことは決してなさらない。これが祈りの第1法則である。神は簡単な逃げ道ではない。...

祈りは私たちのなすべきことを神に押しつけることではない。祈りは、神がわたしたちに自分でできるようにさせてくださる、そのための手段である。

2 祈りは状況を変えず、われわれを変える。

状況は前と変わらない。だが、私たちは新しい勇気と新しい力とそれに取り組む新しい能力とをもって、その状況に対応できるのである。

祈りは、わたしたちが人生の困難に新しい仕方で対処できるように、助けてくれるのである。

2月20日 祈り(2)

さらにもう二つある。

祈りは逃避ではなく、征服である。祈りはわたしたちを助けて困難な立場から逃れさせてくれるからくりではない。祈りはわたしたちを助けて困難な状況に直面させ、これを征服させてくれるものである。

祈りは神に語るというよりもむしろ神に聞くことである。神にやってもらいたいことを申し上げるというよりもむしろ神の望みたもうことを聞くことである。

2月22日 電話ボックスと大寺院

英国の建築家ジャイルズ・ギルバート・スコット卿は非凡な榮譽をになっていた。彼はリヴァプール大寺院を設計するとともに街の電話ボックスも設計したのである。壮麗なる雄大さと飾り気なき実用性とは、同じ人間から生み出されたのである。

真に偉大な人物は小さいことを軽蔑しない。

ジャイルズ・ギルバート・スコットは現代の大寺院建造のためにその天才を用いた、が同じように電話ボックスを造るためにも全身全霊を打込んだのであった。

われらの主もまたこれと同じ態度をもっておられた。彼は救い主であるとともに大工であった。人類を救ったお方が、金づちを手に牛のくびきを作られたのである。

小さいことに忠実であることが、偉大な仕事をするための大きな条件である。

寺院で人びとは神に語る。電話ボックスでおたがいに語る。

自分の兄弟と仲たがいでいる人は、神と交わることはできない。神と交わっている人は、同胞とも友好関係にあるはずである。電話ボックスと大寺院は、人と人とのつながり、人と神との交わり、を象徴している。その一つを欠いては他も得られないのである。

なにをやるにしても、全力をあげてやらなければならない。人びとに世間の眼につく仕事をやらせるのは容易だが、つつましい仕事をやってくれる人を見つけるのはむずかしい。

しかし、神に仕える仕事には、大小の別も、重要非重要な別もない。

電話ボックスにせよ大寺院にせよ 全力をあげてやりなさい！

3月2日 勝利(2)

わたしが試験をしたことのあるひとりの学生が、精神哲学で優等賞を与えられ、大学院を卒業した。彼が牧会学課程を取ったとき、わたしはギリシア語と英語聖書の試験をしたわけである。彼の成績はギリシア語94点、英語聖書86点であった。

一ついい落とししたことがある。彼は全然眼が見えないのである。

身体的欠陥は克服すべきものである。

大きな身体的欠陥を持った人が偉大な仕事をなしとげ、偉大な勝利を獲得した例はきわめて多い。

ジュリアス・シーザーはてんかんもちであった。

偉大なローマ皇帝アウグストゥスは胃潰瘍をわずらっていた、とある歴史家たちはいつている。

最優秀の空の勇士ダグラス・ベイダーがもっとも華々しい勝利を収めたのは、両足を切断し義足で歩くようになった後のことであった。

勝利とはかくのごときものである！

身体的欠陥には必ずこれを償うものがある。

わたしの耳はほとんど全く聞こえない。おかげで駐車場のすぐ近くにあるやかましいホテルでも、ぐっすり寝られる。仕事や研究に熱中できる。雑音が入ってこないからである。退屈な委員会では、補聴器のスイッチを切ることも出来る！

身体的欠陥には償いがある。それをどう受取るか　そこに希望と絶望の分れ目がある。

身体的欠陥を克服する決意を固めるなら、自然があなたの味方となって、勝利へと導いてくれる。

眼の見えない人は聴覚と触覚が鋭くなる。身体の不自由な人は、身体の他の部分を使ったりして、普通の人にはできないいろんな方法を考え出す。

自然は、降参してしまわない人間を愛する。

3月3日 勝利(2)

身体的欠陥があってもこれを克服する覚悟を決めるなら、自然が味方になって応援してくれる。

わたしは、非常にむずかしい眼の大手術をしなければならなかった女の人を知っている。光線が少しでも入るといけないので、眼にほうたいをしたまま、長い間病院のベッドに寝ていなければならなかった。

その人がわたしに話してくれたことだが、1週間もたたないうちに、足音を聞いただけでどの看護婦さんが廊下を歩いているかがわかり、だれかがベッドのふとんに触ただけでその人がだれであるかをいい当てることができるようになった、ということであった。からだの一部が機能を停止したのでそれを埋め合わせるために、残りの部分が鋭さと力を増し加えた、とでもいうふうであった。

自然は、降参することを拒否する人間を好む。敗北を認めさえしなければ、身体的欠陥なぞに負けるものではない。また敗北を認める必要なぞ決してありはしないのである。

敗北を認めないためには人生の目的をもっていなければならない。

…その点で最も偉大な人間はパウロであった。彼は肉体にあの怖ろしいトゲ　むしろ杭(くい)と訳すべきだ　をもっていた。それがからだのなかであばれまわり、ものすごい苦痛を与えたのである。だが彼は二つのことによってそれに打勝ったのである。一つは彼の決意であり、もう一つは神のおどろくべき恵みであった。その恵みにより、彼の弱さは神の力を受けて強くせられ、何ごとをもなしうる者とせられたのである(コリント第二,12・9、ピリピ4・13)

わたしたちに身体的なハンディキャップがあるのなら、わたしたちと神とが一緒になってこれに当たるべきである。そのときかならずよい結果がえられるであろう。

3月6日 慎重に！

非常に貴重なものにさわったり、これを取扱ったりするときには、きわめて慎重でなければならない。

無邪気な子どもの心に触れたり、これを扱ったりするとき、教師や親は十分に慎重でなければならない。友情や恋愛の場合も同様である。さもないと人間関係のもっとも美しいものが傷つけられ、そこなわれ、損じられてしまうからである。

人生の美しきものは注意深く扱われなければならない。

人生における危険なものにぶつかる時、きわめて慎重でなければならない。…

善悪いずれに対しても大きな潜在力をもつもの、破滅と祝福とを同じようにもたらしうるもの、を使用する際には、きわめて慎重でなければならない。

世の中には、善悪いずれに対しても無限の潜在力をもっているものがある。たとえば、ずっと昔ヤコブがいったように、人間のことがさうである(ヤコブ3章)。私たちは自分の舌を、大きな善をなすためにも、無限の害悪を生み出すためにも、使うことができる。舌は、人びとを説いて善をなさしめることも出来るし、彼らをかどかわして悪に陥らせることもできる。友情を固め、争いの中に平和をもたらすこともできるし、人びとを怒りのうちに分裂させ、親しい関係を打ちこわすこともできる。舌は真理の証人となることもできるし、嘘をまきちらすこともできる。

貴重なものを慎重に扱い、危険なものを慎重に避け、善悪への大きな潜在力をもつものを慎重に用いる人はかしこい人である。

3月8日 いまやりなさい！

いつでもやれるし、いつでも見れるというものがある一方、チャンスがなければやれないし、一生に一度しか見れないというものもある。これは人生の法則である。いまいった後のほうのものを、またやろうと思うなら、そのチャンスをつかまなければならない。それは二度と訪れないのだから。

賛美や感謝のことばを伝えるべきであるならば、今伝えなさい。人生は不安定なものであって、それを伝えるチャンスはもう来ないかもしれないのだから。

ある人の仕事ぶりを見てお気に召し、
信頼と好意を心を感じたら、
本人にそういつてやれ、いますぐに
遠慮して控えているのはよろしくない。

おえらい人が弔辞よみ、
彼は百合咲く野辺の下、
となつては遅い、叫んでも
彼にはなにもきこえない。

ひとたび死んでしまったら、
墓の文字なぞ読めはせぬ。

相手がいるうちに愛と感謝の気持ちを伝えるべきである。

警告のことばも、多くの場合、いまいうべきである。

だれかが早めに警告してやればよかったのに、それをしなかったため破滅的な誤りを犯してしまった人がいる　これは人生の悲劇の一つである。警告してやっても、かえって反発されることがある。

警告の仕方にしても、よほど気をつけなければならない。苛酷ないい方をしたのでは百害あって一理なしである。しかし、たとえ反発されても、いわないよりは、いったほうがいい。このことについてはすでに述べた、がもう一度強調しておく価値がある。

贈り物もたいていはいますぐ与えたほうがいい。

古いラテン語のことわざに、*qui cito dat bis dat* というのがある。「早く与えるものは二度与えたと同じ」という意味である。相手が必要としているときに贈った贈り物は二倍の価値を持つ。それを伸ばしていると、遅すぎてもう贈れなくなってしまうことがある。

せっかく良い衝動が心に生れても、すぐに実行しないために、ほどなく死んでしまう、という場合が多い。

決心はいまここで実践に移すべきである。

ロウエルがいったように、

真理と虚偽との戦いで
善悪いずれの味方につくか
決めねばならぬときがくる、
すべての人間すべての国に
一度はかならずやってくる。

良い衝動が起こってくる。ところがその実行をひきのばす。そうした場合、その衝動はもはや二度と起こってくることはないのである。「あなたたちは誰に仕えるのか、それを、きょう、選びなさい」
(ヨシュア 24・15)

3月9日 少しずつ

一つのことにくり返し努力を注入すれば、一つ一つの努力はたいしたものでもなくとも、ついには大きなことをなしとげることができる。

…小さなことも、くり返しやれば、大きなことを成し遂げることができる。しかし、続けなければだめである。…大事なのは、小さい、たえずくり返される努力である。

同じことをたえまなくやっている、ついにおどろくべき変化が起こる。

このことを証明するもう一つの実験がある。澄んだ水の入ったたいへん大きなビーカーと染料の入った小さなびんを用意する。染料を一滴ずつ水の中におとす。はじめは、何の変化も起らない。水は、眼に見えるかぎり、前と同じである。だが少しずつ色がほのかに、かすかに見えてくる。やがて色が濃くなり深まってくる。そしてついに、ビーカー全体の色が染料の色に変えられてしまう。

一滴ずつ それがこの変化をもたらしたのである。

完成は小さなことによって達成される。これは常識である。

「小さなことをさげすんだのは誰か」とゼカリヤはいった（ゼカリヤ 4・10）つまらないことは捨て、重箱のすみを楊枝（ようじ）でほじくるようなことはしないほうがいい、ということもあるだろう。しかし小さなことを無視するひとは、往々にして、大きなことも失ってしまうものである。小さなことを慎重にやる人は、やがて、真に偉大なことをなしとげるであろう。

3月11日 我らの友なる神

この世で最も貴重なのはよき友である。いつ行ってもいやな顔をされない、必要な時にはいつでも相談にいける、なんでも話すことのできる、夢のような話をしてもけっして笑わない、こちらの失敗を決してあざげられない、そういう友である。もう一度いうが、いつ行ってもいやな顔をされない友である。

合っている間じゅう時計ばかり見ている人、10分だけだよといわぬまでもそういう顔をする人、話していてもつぎの約束ばかり気にしている人、こちらを邪魔もの、厄介ものとしか考えない人、そういう人にあった経験は誰でももっているだろう。

イエスの生涯に起こった素晴らしい出来事がある(マルコ6:31-34)。群集が執拗に押し迫ってくるので、イエスと弟子たちは休むひまも食事をするひまもなかった。そこでイエスは弟子たちとともに船に乗って湖の向こう岸にいった。しばらく寂しいところで休むためであった。ところが群集はイエスが立ち去るのを見て、湖の周りを走ってゆき、イエスより先にそこについた。

ほかの人だったら、この群集を完全に邪魔もの扱いしただろうし、群集のほうでもそれを感じとったにちがいない。だがイエスは彼らを見て、「飼う者のない羊」のようなその有様を深くあわれんだのであった。彼は疲れ、苦しみ、空腹を覚えていた。静けさを求めている。しかしそれでも、彼を必要とする人びとは、彼にとって、厄介ものではなかったのである。

神の態度もまたこれと同じである。